学習の手引き

郷土 砺波

令和７・８・９年度版

はじめに

私たちの住む郷土砺波は、牛岳に連なる青く清らかな山々と清流庄川、庄川の扇状地に広がる散居村の景観等、美しく自然豊かなまちです。また、近年、「住みここちのよいまち」として知られています。

今回の改定は、地理、公民分野を中心に最新の資料を基にデータの更新を行いました。皆さんの地区の人口、砺波市の予算、少子高齢化の状況から、どんなことが読み取れますか。そして、皆さんは何を考えますか。この本を手がかりにして、砺波市の地理、歴史、文化、産業、市政等をより身近に感じ、理解を深め、砺波の未来を考えていってほしいと思います。

皆さんが、ふるさと砺波を誇りに思い、郷土を愛する砺波市民に成長されることを心から願っています。

令和７年４月

砺波市教育委員会
教育長　白江　　勉

目　次

はじめに

第１章　砺波の地理

1　散村と私たちの暮らし　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　富山県の中の砺波市　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
3　砺波市のあゆみ　（昭和と平成の大合併）　・・・・・・・・・・・・6
4　大きくながめてみよう ～環日本海交流をすすめる富山県～　・・7
5　砺波の気候　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
6　庄川と私たちの生活　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
7　砺波市の特産物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
8　砺波市の商工業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第２章　砺波の歴史

1　砺波のあけぼの　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
2　花ひらく縄文文化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
3　東大寺の大仏と利波臣志留志　・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
4　般若野荘と油田条　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
5　増山城をめぐる争乱　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
6　近世の砺波　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
7　近現代の砺波　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　太平洋戦争　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
8　農作業の移り変わり　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　洪水と地震　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

第３章　砺波の市政

1　砺波市のまちづくり　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
2　少子高齢社会と砺波市　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

図版　砺波市の歴史年表
　　砺波市の歴史地図

1 散村と私たちの暮らし

上空から見た砺波平野（平成14年9月1日撮影）

砺波平野の散村

砺波平野の家は、写真のように一軒一軒が約100 m～150 m間隔で、バラバラに点在しています。これを**散村**❶（または散居村）といい、全国的にも珍しい集落形態です。

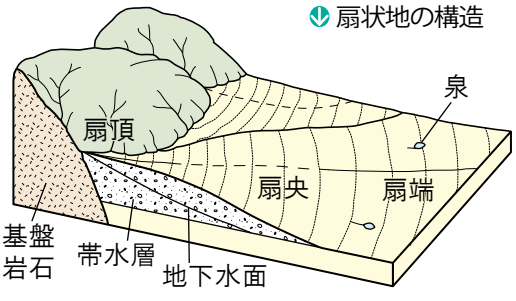
❶ヨーロッパでは散村は、北ヨーロッパ、イギリス、アルプスとその周辺地域、ディナルアルプス山麓のほか、ロアール川下流域などで見られます。日本では、富山県の砺波平野、黒部川扇状地、静岡県の大井川下流域、香川県の讃岐平野、島根県の出雲平野、岩手県の胆沢扇状地などが知られています。

散村ができるまで

砺波平野は、主に庄川がつくった**扇状地**です。用水をつくる技術が発達すると、それまで森林が広がっていた扇央部の開拓が本格的に始まりました。奈良時代には東大寺の荘園が作られ、日本有数の米どころとして知られるようになりました。

庄川は流れが速く、ダムや堤防ができるまで洪水が非常に多い川でした。そこで、人々は平野の中で少し高くなっているところ（微高地）を選んで住むようになりました。扇状地は扇頂から扇端に向けて傾いています。その傾きを利用して、どこにでも水を引き、田んぼをつくることができました。耕作や手入れがしやすいように家の周りを自分の田んぼにしていった結果、家と家が離れ、散村ができたと考えられています。他にも、砺波平野に吹く強風で火災が広がるのを防ぐために家と家との間が広がったともいわれています。

扇状地の構造

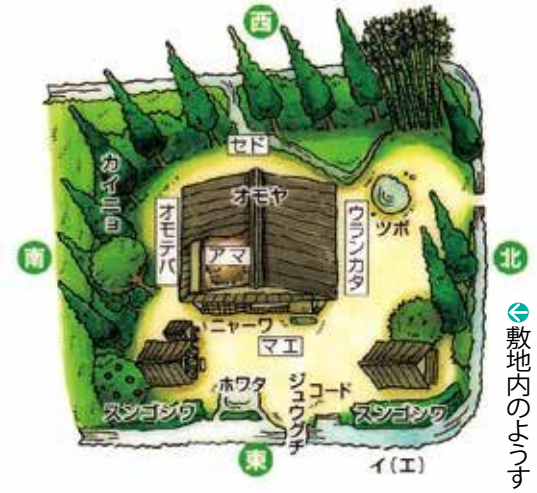


アズマダチの家屋（砺波市太田）

マエナガレの家屋（砺波市五郎丸）

アズマダチとマエナガレ

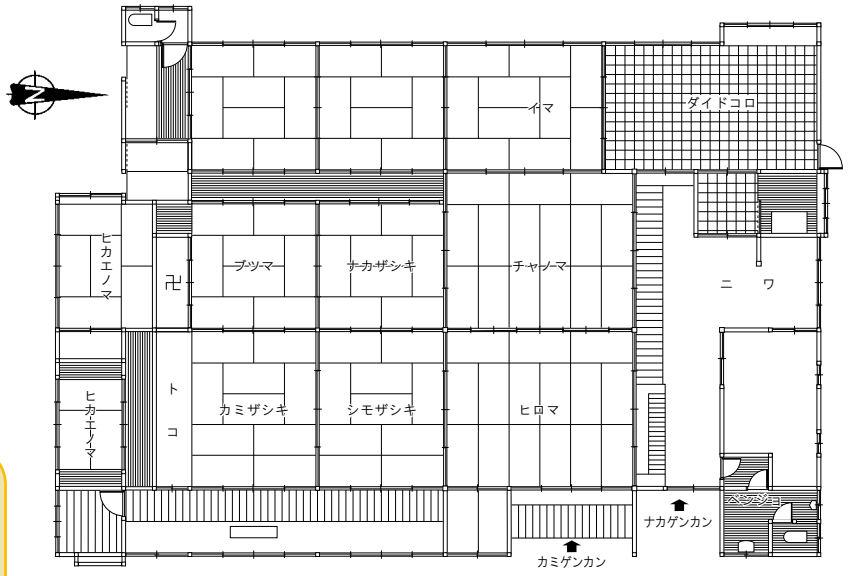
かいにょ苑（砺波市豊町）



敷地内のようす

江戸時代まで、砺波地方の家の多くが、かやぶき屋根の「クズ屋」でした。屋根は右の写真のようにすべての面が傾斜していて冬に雪おろしがしやすいよう工夫されていました。明治時代になって**アズマダチ**（東建ち）❶や**マエナガレ**（前流れ）と呼ばれる形式の家が広まりました。

下の部屋割りの図のように、アズマダチはしきりの壁が少なく、高い屋根を太い柱で支えています。板戸を取り外すと「ブツマ」から「チャノマ」までつながり、大きな畳の部屋（座敷）ができます。そこで、「ホンコサマ」❷などの法会を行い、近所の方や親戚を集め、ご馳走をふるまいました。



アズマダチの部屋割り

西風が強いので、玄関は東に、仏間は南側につくられました。

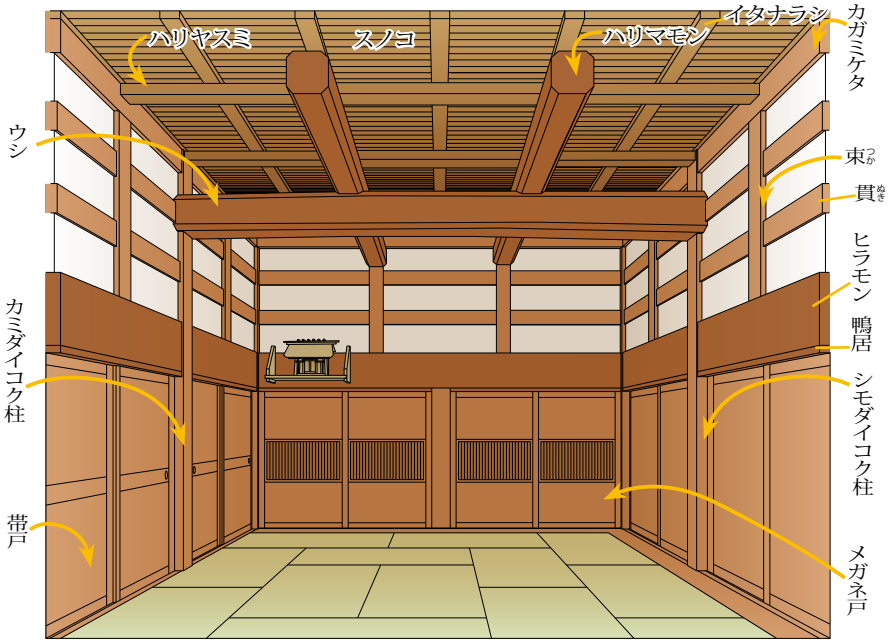
❶ アズマダチのデザインは、江戸時代の金沢の武家屋敷に発し、それが江戸末期に十村役の役宅などに取り入れられたもので、農民があこがれたデザインでした。

❷ ホンコサマ（報恩講）は、浄土真宗を開いた親鸞上人の亡くなられた日（11月28日）に毎年行われる法会です。親鸞の好物だと言われる豆と様々な野菜や油揚げなどを柔らかく煮込んだ「いとこ煮」が仏壇にそなえられました。経が終わると、そのいとこ煮を中心に、何日もかけて用意された精進料理を食べながら語り合い、親戚や近所同士の絆を深める楽しい時間を過ごしたといいます。

砺波平野の民家は、家の向きが北東から南東を向いている家が95%を占めています。これは、砺波は**東からの風が極端に少ないこと**が原因だと思われます。

広間のワクノウチ

砺波の伝統的な家は、広間が間取りの中心になります。広間は、**ワクノウチ造り**（枠の内造り）といって太い梁や差鴨居（ヒラモン）を組んだ構造になっています。



ワクノウチ造り

家の周りに田んぼを作る

稲作で重要なことは水の管理です。朝夕に田んぼを見回り、天候や稲の成長を考えて田んぼの水を調節すると質の良い米がたくさん収穫できます。肥料をまいたり、刈り取った稲を雨が降る前に素早く取り込んだりするのにも、家の周りに田んぼがあるのは効率的です。散村は、常に田んぼを観察し、きめ細かく世話ができるように工夫した、先人の知恵なのです。

「高（土地）を売ってもカイニョは売るな」

立派な屋敷林に住むことを誇りにして、先祖代々からの屋敷林（カイニョ）を大切に守り育てようということ。昔はカイニョの大きさで家柄を示したそうです。しかし、砺波地方では、大切にされてきた屋敷林が現在失われつつあります。未来に美しい散村の景観を残すために私たちにできることを考えてみましょう。

カイニョの役割

① 強い風や冬の風雪から家を守ります

・山に当たって吹きおろす冬の風は、平野部の２～３倍の強さになります。暴風による屋敷の破損を屋敷林は防いでいました。
・しばしば起きた洪水のとき、木の根が家の基礎を守り、被害を最小限に抑えました。

② 夏の暑さや冬の寒さをやわらげます

・フェーン現象の発生によって砺波平野の夏の最高気温は沖縄より高くなることがあります。屋敷林は、木陰をつくり、湿度を調整することで体感温度を 10 度近く下げます。

③ スンバ（杉葉）や小枝はイロリや風呂炊きの貴重な燃料として使われていました

・屋敷林から出た落ち葉や小枝は燃料となりました。囲炉裏を囲んで家族は、暖をとり冬の寒さを防いでいました。

④ 家を建てる木材や生活道具の材料に使われます

・砺波平野の屋敷林には杉が多く、建物が古くなったり、壊れたりしたとき、屋敷林は建材として活用されました。竹なども生活に必要な道具に加工されました。

⑤ 実のなる木を植えて食料とします

・柿やいちじく、びわなどの果実は、食生活を豊かにしました。

散村と散居村、どっちが正しいの？

ふだん生活していると道路の看板や新聞・テレビで「散居村」という言葉を目にします。古くから地理学や学校教育では「散村」が使われており、砺波平野のように民家が点在する集落形態を全国的には「散村」といいます。しかし、富山県内では「散居村」を使うことが多く、その背景には、散村が「山村」と同音でまぎらわしいという理由があると思われます。

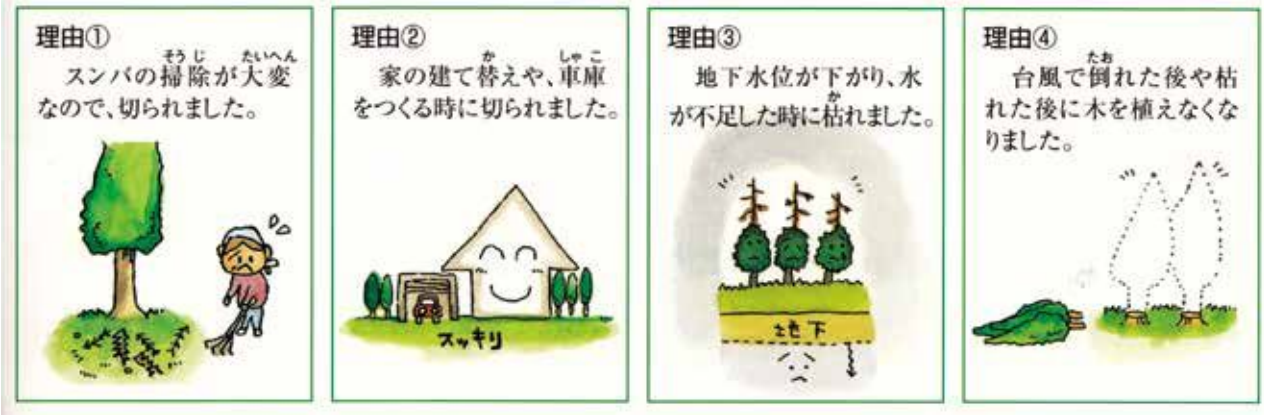
失われていく散村と屋敷林

農業が近代化すると、散村の利点は少なくなりました。また、1960年ごろから住宅団地が多く造成されたこともあり、散村景観が失われつつあります。

また、屋敷林についても、電気やガスの普及で落ち葉や小枝が燃料として利用されることがなくなりました。建材として利用された杉の木も、安い輸入材や化学合成された建材に押されて利用価値を失っています。このほか下のような理由により、屋敷林は伐採され、失われつつあります。

散村に造成された住宅団地

屋敷林が減ってきている理由



散村の景観を守るために

美観を保ち砺波らしさを守ること、自然とのかかわりや環境問題への対応などから屋敷林（カイニョ）の新たな役割を見直す活動が始まっています。

新たに見直されている役割

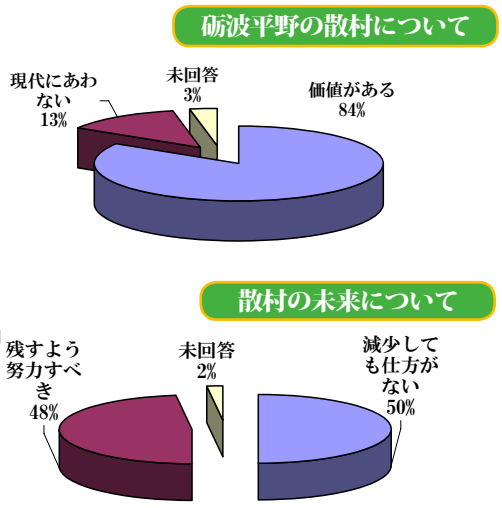
1 美しい景観や文化的景観をつくります。
2 空気をきれいにします。
3 夏の暑さや暴風を和らげます。
4 安らぎと潤いのある生活をあたえます。
5 身近な生き物の生息場所となって土や水が浄化されます。

かけがえのない散村の景観を守るために、国・県・市ではさまざまな取り組みを行っています。

国・県・市の取り組み

- ○ 屋敷林を守る協定を結んだ集落に対し、屋敷林の枝打ちなどにかかる費用を支援しています。
- ○ 散村の文化的な景観を守るために調査を行っています。
- ○ となみ散居村ミュージアムを開館し、市民が散村を学ぶことのできる場を作っています。
- ○ 屋敷林から出る剪定枝の処理として、戸別回収や「剪定枝リサイクル大作戦」を実施しています。

住民アンケートの結果（平成17年実施、対象：砺波市・南砺市）



となみ散居村ミュージアム（砺波市太郎丸）

2 富山県の中の砺波市

私たちの住む砺波市は県西部のほぼ中央部に位置し、2004（平成16）年11月に砺波市と庄川町が合併し、新しい砺波市ができました。

砺波市

砺波市の市章

砺波市役所の位置　北緯36度38分　東経136度57分　標高46.8ｍ

LET'S WORK 1

❶砺波市の市域を赤でなぞりましょう。

❷富山県には10市4町1村があります。地図に市町村名を書き込みましょう。

❸砺波市を中心に、半径50㎞の円を書き込みましょう。

◇富山県内の市町村の比較　（令和６年９月１日現在）

地区	市町村名	人口（人）	面積（㎢）	平成の市町村合併前
富山	富山市	404,115	1,241	富山市・婦中町・大沢野町・八尾町・大山町・山田村・細入村
	滑川市	31,687	54	
	舟橋村	3,218	3	
	上市町	18,042	236	
	立山町	23,649	307	
新川	魚津市	38,069	200	
	黒部市	38,129	426	黒部市・宇奈月町
	入善町	21,997	71	
	朝日町	9,981	226	
高岡	高岡市	160,163	209	高岡市・福岡町
	射水市	88,659	109	新湊市・小杉町・大門町・大島町・下村
	氷見市	40,329	230	
砺波	砺波市	46,773	127	砺波市・庄川町
	小矢部市	27,381	134	
	南砺市	44,528	668	福野町・福光町・城端町・井波町・井口村・平村・上平村・利賀村

3 砺波市のあゆみ（昭和と平成の大合併）

現在、砺波市は 21 地区から構成されています。この 21 地区は、町村合併の歴史と深い関係があります。

各地区には自治振興会があります。地域住民がゴミや環境、安全や防災、教育や文化・スポーツの分野で、児童クラブや成年会、婦人会、老人クラブなどの組織を作り、様々な自治活動をしています。

◇ 砺波市　町村合併のあゆみ

1952（昭和 27.4）	出町と林・五鹿屋・油田・庄下・中野の１町５村が合併して砺波町を新設
1952（昭和 27.6）	東山見・青島・雄神・種田の４村が合併して庄川町を新設
1954（昭和 29.1）	高波・東野尻・柳瀬・太田・南般若の５村が砺波町に編入
1954（昭和 29.3）	般若・東般若・栴檀野・栴檀山の４村が砺波町に編入
1954（昭和 29.4）	砺波町が市制をしき、砺波市が誕生
1955（昭和 30.1）	鷹栖村が砺波市に編入
1957（昭和 32.9）	若林村の一部が砺波市に編入
2004（平成 16.11）	砺波市と庄川町が合併し、新「砺波市」が誕生

◇ 砺波市の地区別人口と世帯数

令和６年８月 31 日現在「住民基本台帳」より

地区名	人口（人）	世帯数（戸）
出町	9,112	3,971
林	4,577	1,709
五鹿屋	2,019	704
高波	1,298	431
東野尻	1,882	656
鷹栖	2,717	928
若林	665	215
油田	5,098	2,177
庄下	2,217	867
南般若	2,579	924
柳瀬	2,026	722
太田	1,460	502
中野	1,581	517
般若	1,682	594
東般若	1,259	427
栴檀野	1,012	361
栴檀山	335	149
東山見	1,706	653
青島	1,814	693
雄神	691	252
種田	1,013	346

LET'S WORK 2

自分の住んでいる地区を赤でぬり、砺波市の中でもどのような特徴をもつ地区か、（人口、景観、産業、文化財などの視点から）紹介しよう。

4 大きくながめてみよう
～環日本海交流をすすめる富山県～

＊この地図は、富山県が作成した地図（の一部）を転載したものである。（平 24 情使第 238 号）
＊この地図は富山を中心とした正距方位図である。

日本海諸国図（にほんかいしょこくず）

富山県が作成した、**「逆さ地図」**を見てみましょう。

日本海が大きな湖のように見え、ユーラシア大陸、朝鮮半島、日本列島が一体的なものに見えてきます。富山県と環日本海沿岸諸国（中国、韓国、ロシア）の貿易額は年々増加しています。**「経済・通商」**のみならず**「文化交流」「環境」「防災」「一般交流」**の 5 つの分野で、交流・協力をめざした国際的ネットワークづくりの中心として富山県も活躍しています。

LET'S WORK 3

❶富山市から半径 1,500 ㎞ 以内にある外国の都市をさがしましょう。

❷富山きときと空港から直行便が出ている各都市を、直線で結びましょう。

富山きときと空港から直行便が出ている都市

〔国内〕**東京、札幌**

〔国外〕**ソウル**（韓国）、**大連**（中国）、**上海**（中国）、**台北**（台湾）

＊国外便は令和６年現在、ソウル、台北便は運休中です。

5 砺波の気候

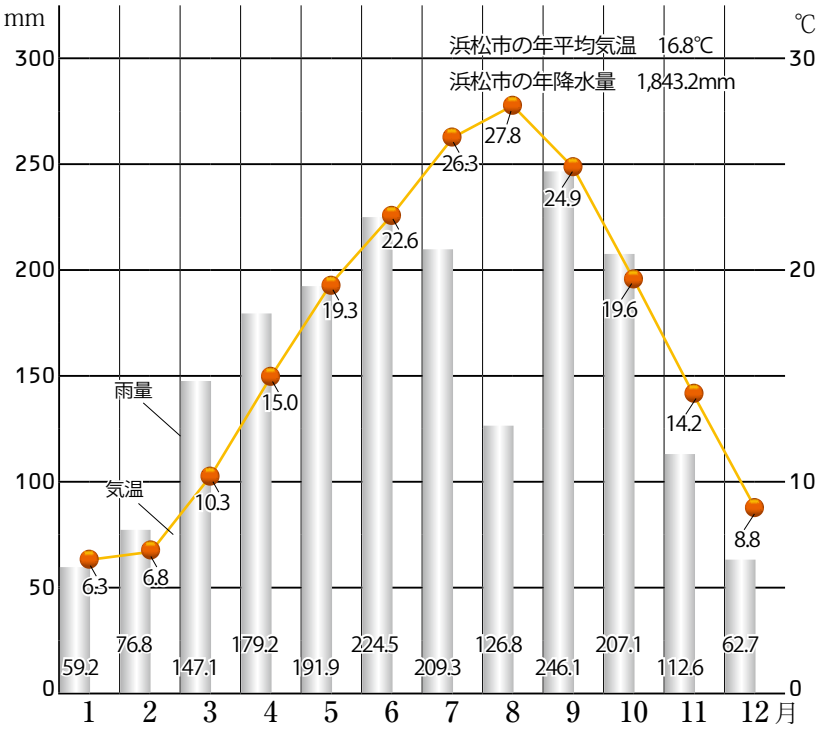
LET'S WORK 4

❶右の気候グラフは、静岡県浜松市の気温（折れ線グラフ）と降水量（棒グラフ）が記されています。

これに砺波市の気温のグラフを赤、降水量のグラフを青で書き入れましょう。

❷砺波市は、浜松市とほぼ同経度に位置しますが、浜松市と気候は大きく異なっています。

この理由を、日本の地形と季節風の視点から説明しましょう。



砺波市・浜松市の雨温図
（気象庁ホームページ　統計期間 1991 ～ 2020 年　資料年数 30 年間）

◇ 砺波市の月別平均気温、降水量、風向き（気象庁ホームページ、統計期間 1991 ～ 2020 年　資料年数 30 年間）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
気温 ℃	2.1	2.4	5.9	11.5	16.9	20.7	24.7	25.9	21.9	16.2	10.5	5.1	平均 13.7
降水量 mm	239.7	151.5	143.1	115.8	110.0	167.7	227.7	201.1	214.0	168.2	220.2	269.3	計 2,228.2
最多風向き	南南西	南南西	南南西	北東	北東	北東	北東	北東	北東	南南西	南南西	南南西	北東

砺波の風は、どこから吹いてくる？！

砺波地方の風向きは、周囲の山地の地形に大きく影響されています。秋から冬にかけて南南西の風が多いのは、シベリアから北西の季節風が背後の山にぶつかって逆流するからであると考えられます。一方で、夏は南東の風が吹くはずなのに北東方向の風が見られるのも、同じ理由からです。

また、春先から秋の台風が日本海に入ってきたときに「フェーン現象」と呼ばれる暑い南の強風が吹くことがあります。富山県の大火のほとんどは、このフェーン現象の時に発生します。市内でも 1939（昭和 14）年 5 月の般若地区の大火や、1944（昭和 19）年 5 月の林・出町・庄下地区にまたがる大火がこれにあたります。

38 豪雪の砺波市街（1963 年）

6 庄川と私たちの生活

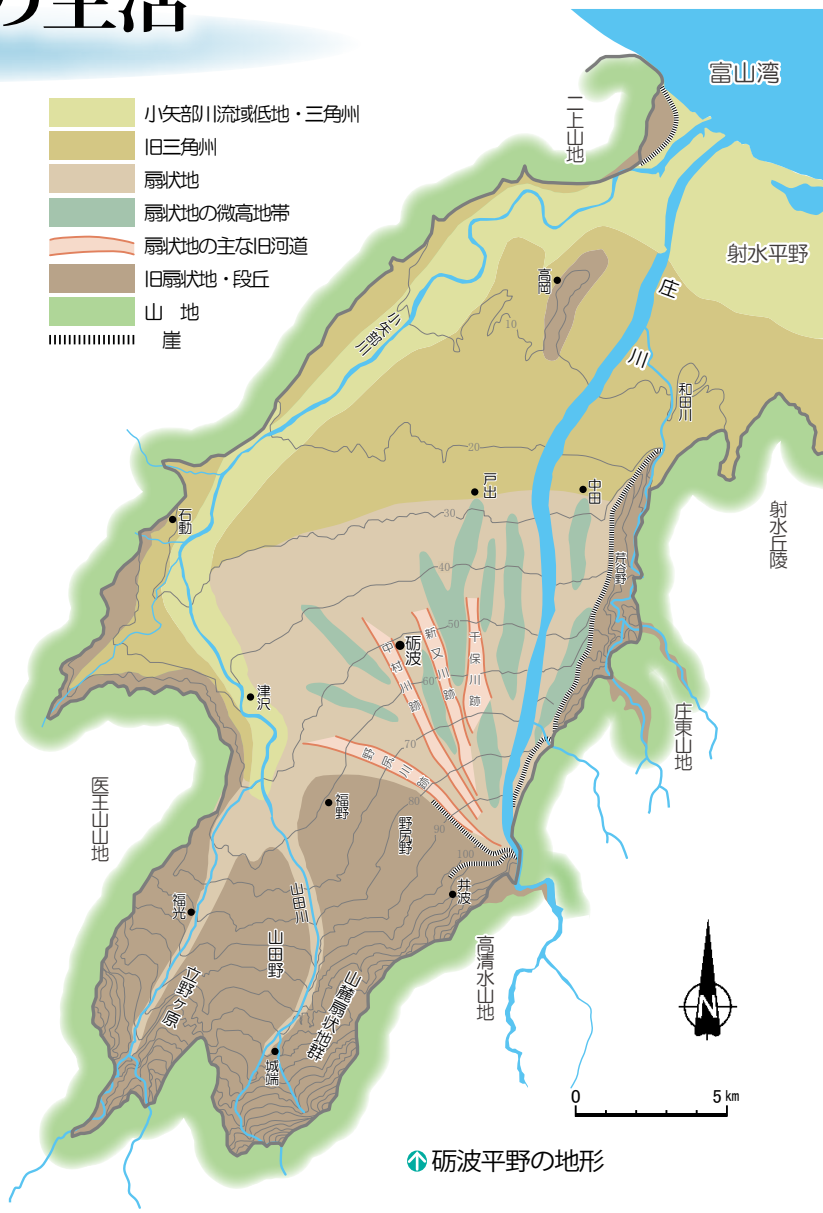
庄川は、私たちが生活している砺波平野をつくり、たくさんの恵みを与えてくれています。ここでは、庄川と私たちの生活がどのように結びついているのか、考えてみることにしましょう。

特色と土地利用

庄川の水源は、岐阜県高山市（旧荘川村）の山中峠(1375m)の山麓、分水嶺は蛭ヶ野高原、流域面積は 1,189km^2、全長は 115km です。

庄川は標高 100m の庄川町金屋で、砺波平野に出ます。洪水ごとに河道を変えて土砂を堆積し、扇形に広がる扇状地を形成しました。かつては西に流れて小矢部川に合流していましたが、洪水で流れを東に移動し、現在のようになりました。

その川跡には微高地があり、そこを中心に人々が住み始めました。その範囲は金屋を頂点として、福野（南砺市）付近から中田（高岡市）付近にまで広がっています。



砺波平野の地形

洪水との闘い

暮らしに恩恵を与える庄川も、過去には大規模な氾濫を繰り返し、人々はこれと闘ってきた歴史があります。庄川の流れが現在のように砺波平野の東に押しやられ、安定したのは江戸時代の中ごろに**松川除堤防**の工事が完成してからです。

けれども、流水を調節するダムが全くなかったため、洪水になると田畑や家屋が流失することが多く、1934（昭和 9）年 7 月の大増水では下流の堤防が決壊し、太田橋が通行人もろとも濁流に流されるという惨事が起こりました。その後、上流に次々とダムが建設され、1961（昭和 36）年、最上流に御母衣ダムが完成してから、水害の危険はようやく少なくなりました。

ところが、1976（昭和 51）年の台風 17 号の時、上流のダムの貯水能力を超えたため、下流の堤防が決壊しそうになり、騒然となりました。

上空から見た松川除堤防

LET'S WORK 5

江戸時代に築かれた「松川除堤防」について調べてみましょう。

庄川流木争議

明治時代になって、富山県が最も力を入れて取り組んだのは、人々の暮らしの安全を守る治水事業でした。1930（昭和5）年に、治水と電源開発を兼ねた多目的ダムとして、当時東洋一の規模を誇る**小牧ダム**が完成しました。

しかし、このダム建設をめぐって大きな事件が起きました。ダムが建設されると川がせきとめられ、木材の流送ができなくなることから、飛州木材会社などが行政訴訟を起こしたのです。

この反対運動は全国の注目を集める中、1933（昭和8）年には木材の搬出をめぐり、約600人もの関係者が大乱闘し、流血する惨事にまで発展していきました。結果的にはダム建設が優先され、県の工業化にはずみがつくことになりました。

庄川流木争議の様子

電源河川と農業用水

豊富な雪解け水を水力発電に利用することに早くから着目したのは、浅野総一郎でした。庄川水系の発電所は、岐阜県平瀬のものが最初1926（大正15）年です。その後、ダムが次々と建設され、現在では庄川水系でダムが11、発電所が23あります。発電能力は約100万キロワットで、県下有数の電源河川となっています。

また、農業用水や工業用水、上水道など、ダムのもたらす恩恵は大きいものがあります。特に、扇状地の砺波平野は、水持ちが悪く、しっかりと農業用水を引かない限り、水田耕作は容易ではありませんでした。1939（昭和14）年に合口（ごうくち）ダム（舟戸ダム）が完成し、砺波平野12,300ヘクタールの水田（受益農家2万戸）を網の目のように潤す農業用水が完成したのでした。

砺波平野の水利系統図

LET'S WORK 6

自分の家の近くを流れる農業用水は、どこから流れているのでしょうか。
上の資料「水利系統図」を参考にし、調べてみましょう。